
護法鬼奇談

タキッチョス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

護法鬼奇談

【Zコード】

Z09410

【作者名】

タキツチョス

【あらすじ】

江戸時代のいつか、山深いどーかの里に起きた悲劇と、ささやかな奇跡の結末。昔語りをしよう、今はもう人ではなくなった者たちの、誰も知るものはない、おどぞばなしを。

麓の村には、有るはずの無い灯火が群れていた。

山頂からは、その灯、松明の炎が、徐々にこの山裾へと、這い登つてくる様までがはつきりと見取れた。

さえざえと空気の澄み渡る夜空に、雲間から覗く星は痛々しいほどけざやかだ。雪こそまだ降つてはこないが、それも程なく、この辺りを真綿のように包んでゆくだらう。

「御坊、追手が迫つております。いま少し、足を早めねばなりますまい」

それまでも必死で木立の間を歩いていた人々は、しかし、男の言葉に反して愕然と歩みを止めた。

「お終えだ……」

「やや子もおじいおばあもいて、これ以上は早く進めねえよ」

「死んでもいいだ、おらたちは極楽さいくだで、怖いこたあねえ」「三十人程の彼らは、一目で百姓と知れた。乳飲み子を抱えた女もいれば、歩くのもやつとの老人もいる。麓の村人全員が、今、里山伝いにおちのびよつとしていたのだ。

淫祠邪教の村と、幕府に知れたからである。

邪教の名は真言立川流という。

山狩りを知らせた男は、彼らとははつきりと異なる雰囲気を持つていた。

ずば抜けた長身に逞しい体つきも異質だが、何よりも、男の物腰

は武士のそれだ。村人同様、着の身着のままのボロを纏っているが、その腰には、随分とこの一群には不釣り合いな剣が鞘も無く、剥き出しのまま具されている。

刀ではない。両刃の剣だ。

三鈷剣、と密教では呼ばれる法具である。刃こそ潰してあるが実際に耐えうる大きさにつくられたそれが、帯がわりに締めた荒縄に差し込んである。

「まこと、無常……我等が、幕府に何の叛心あるといわんや」

人々の中心にいた、僧形の老人が、絞り出すように呟いた。即身仏かと見紛うほど皮膚は皺ばみ、瘦せこけていたが、柔和な眼差しは涙に濡れていた。

「将月、そなた、村の者を率いて逃げよ。このまま尾根伝いに、国境の峰に紛れるのだ。その辺りに住まいする山人に助力をあおぎ、皆を守つてやつてほしい」

「御坊はいかがなさるのです」

尋ねたのは、将月のそばにひつそりと控えていた美女だった。やはり見すぼらしい百姓女の服を纏っているが、これも、武家の出と知れる。

「儂は、お上のものとへいこうと思つとる」

干からびた手は、今や刻々と迫つてくる灯火の列を指した。

「いけません、お上人様！」

「お上人様を見捨てて、おらたちだけ逃げるなんてとんでもねえ！」

「たとえ、御坊が行かれても、役人は百姓衆を狩るでしょう。村を捨てたは、年貢を納めぬと同義。一揆よりもきついお仕置きになるは必定」

「わかつておる、麗月。だから、お前たちは早く逃げなさい。この皺首一つ、些少の時間稼ぎにはなつてみせようよ」

麗月と呼ばれた女は、将月を見上げた。

「兄上……」

将月は静かに頷いた。座り込んでしまった村人たちに向かって、

「捨吉」

「へい！」

弾かれたように、百姓の一人が立ち上がった。まだ若い。二十は超えていないだろう。彼の足元には彼によく似た小さな女の子がいて、親指をしゃぶりながら、緊張した面持ちの父を不思議そうに眺めている。

「皆と御坊をつれて、急ぎ尾根へ抜ける。お前はよく鹿を獲つてから、山には慣れていよう。我等はここで、役人達をくい止める」

「ならん、将月、麗月！ 命を粗末にするは、わが教えのもつとも忌むところぞ！」

「よく存じております。ですから、我等がいくのです」

泰然と微笑む将月のとなりに、麗月が寄り添う。

「御坊が生きておいでなら、その教えに従い、子殺し子捨てをするものも減りましょう。我等は、その命の行く末を、守りとづける。脱力していた村人たちが、一人、二人と立ち上がる。

「御坊を頼んだぞ、捨吉。皆も、達者でな」

「将月様、麗月様、ご無理をしてはなんねえだよ」

「きつときつと追いついてくださいませ、おらたち、ずっとお待ち申しております」

死の絶望と恐怖に、一縷の希望が打ち勝つ。

村人たちとは、子を抱き直し、老いたものを支え、再び歩き始めた。

佇んだまま、その場から動こうとしない老僧を、捨吉が促す。

「上人様、将月様たちのお志しを無にしてはなんねえだ。な」

「将月……麗月……お前たちも、清月と同じ修羅道を行くか」

「天も人も修羅も同じ六道のなたと、お教えになつたは御坊でござるよ」

木立を縫う夜風にのつて、殺氣だつた人の気配が伝わってくる。

麗月が、腰に下がった袋から、金の鈴を取り出した。五鈴鈴。やはり法具だ。

「兄上、山の反対に廻つましゅうべ。やうじで、これを鳴らせば、少し
は」

「つむ。……御坊、剣と鈴は済ませぬが、我等がお預かり申す。

御免

兄妹は、もはや振り返りもしない。新月の木立の闇に、下草を踏む音も程なく消える。

「無常よ……」

その闇に、老舗は深く頭を垂れ、合掌した。

「追手の数は、たゞして減つてはおらぬよつですね」

「……そうだな」

星明りも、生い茂つた林の中には届かぬ。真闇に近い山の斜面を、ほとんど升せぐりで、武士の兄妹は互いを気遣いながら、横切つていぐ。

「清月も、では」

「もとより、生き長らえるとは、思つてはいなかつたる」

闇に紛れてはくるが、多分麗月は、顔をしかめている。

「御坊や、兄上に逆らつて、大口をたたいておきながら、そして役にも立たぬとは。我が半身ながら、うららは情けのうござります」

つりり、と得度前の口の名を口元にして、あ、と麗月が声を詰まらせた。

「今は、麗月でございました」

「氣にするな。清月も、村の者や、御坊を案じていればこそ、あの様な言いようをしたのだ。文句は、三途の川を渡つたあとで、好きなだけ本人にいえばよい

「そうですわね」

さばさばとした口調で、麗月は、五鉢鈴をりん、と鳴らした。

りん。りん。

斜し、朗々とその音が山に響きわたる。

「畜生腹の犬同士、きっとあの世でも咬み付き合ひのが定め」

「そういうな。私には、一人とも大切な妹と弟だのに」

将月は苦笑している。双子に生まれ、共に世間から疎まれた分、姉弟の絆が深まつても良さそうなものなのだが、この妹と、恐らくはもう命の無い弟は、物心付く前から仲が悪かつた。

「あやつが先に待っているとなると、私は後生でもお前たちの仲裁をせねばならんな」

「兄上に御迷惑は懸けません」

りん。

「それくらいなら、清月をひきずつて、紅蓮黒縄に参ります」「氣丈な妹。闇の中で、つないだ手は、それでも震えている。

り、りん。りん。りん。

武士だろうが、百姓だろうが、死は怖い。それが当たり前なのだよ。

老僧の声が、耳に蘇る。

なんの違ひもない。生まれ方も、死に方も、人は皆同じだ。

御仏の教える前に、身分も、財産も、ない。命は、どんなものでも、生まれてきたことがすでに尊いのだ。命を成すことも、だから慈しまれなければならないのだよ。

それは、畜生腹とさげすまれた双子の弟妹を救う光だった。武士の格式にとらわれていた将月を救う光だった。

そうした光で、導かれ、救われる者が、もつとおればよい。そのために、我等兄妹が礎になる。まだ生まれぬ、救われぬ魂よ、生きよ。

ふいに、木立の彼方が、赤く染まつた。

御用だ、召し取れ、の声が間近に迫つていた。

「兄上、清月に見せてやりましょう。私は、誓つて殺生は致しません」

「己の命にも、それを誓いなさい、麗月。無駄に捨てて良い命はない」

腰の三鉢剣を、将月は抜いた。刃の無い剣は、しかしもとは彼の愛刀を鑄潰した鋼でできていた。

「形は変われど、結局、最期もこれと一緒にとは、武士の因果か……」

取り囲む炎、それに照り映える白刃の輝き。

「行ぐぞ」

「はい」

闇の中から、光の中へ、そうして一人は進み出る。

「邪教の守り手はこれなるぞ」

堂々と名乗つた将月の声を、怒号がかき消した。

将月達が立ち去つたばかりの村へ、時は戻る。かわたれ時には少し早い、人気の無い村には、すでに血臭が漂つっていた。

「ひいつ、ひいつ」

貧相な村のたたずまいとは対照的に、贅を凝らした屋敷の周辺である。立派な構えの表門から、累々と、死体が転がつているのだ。死体は、農村には似つかわしくない、やぐざ者の風体ばかりであった。

「庄屋あ、おめえだよなあ、代官にある事無い事吹き込んだのはよ」脂ぎつた小男は、奥座敷に追い詰められ、ガタガタと震えて声も出せぬ。

切り取られたのはまだ片耳だけだから、声は聞こえていようし、口もきけるはずなのだが。

問うた男は、黒っぽい古着を着流しにした浪人の体だ。鋭く切れ上がった目つきは、将月や麗月に似かよつたところがある。全身に返り血を浴び、薄笑いを浮かべた様は、悪鬼ながらの凶相であった。

「そりやあ、坊さんは立川流さ。けどな、その坊さんが、荒れ寺も墓場もきれいにしてよ。寺子屋の真似事から、病人や怪我人の面倒までみてたんじゃねえか。そのお人を、なんだつて村長のお前さんが売りやがる？ 頭下げるのが普通だろ」

「む、娘たちを売るのを、邪魔したじやあないか、あの人は猿のように歯を剥いて、ようやく庄屋は声を出した。

「あ、あんたたちに命じて、みんな連れ戻しちまつた。それじゃあ村の連中の、迷惑だつた、から、い、子供もまびかねえよ」になつちまつたていうのに、「

「親が泣いて売った娘らの代金に、びた錢しかよこさねえで、なに言つてやがる」

それまで肩に担ぐよつて構えていた刀を、ひょいと清月は そ
う、この男が清月だ 無造作に降り下ろした。

庄屋の左足の親指が、ぶつんと飛んだ。

「ひいいいっ」

「売った金の八割は、お前が懐にいれてただろうが。おまけに娘ら、
お前と、女銜の子飼いがさんざ遊んでから、売られていく。店に着
いた時には、みんなおかしくなつてゐるそつだぜ、知つてたか？」
「ごとん。

今度は、足首が濡れ縁から庭へと転げ落ちた。

「あ、あんたは知らないんだ、都で立川流といえば、そりやあ恐ろ
しい、死体から骨を取り、行のさなかでできた赤子も殺す、畜生の
集団……」

「そんなんえげつねえ行に狂つてんのは、金も暇もある馬鹿野郎ども
だけだぜ」

返り血に染まつてゐるが、ひどく生真面目な表情が清月の顔に浮
かぶ。

「立川流つていつたつて、あの坊さんは髑髏拌めの、見境なくまぐ
わえの、そういう事はいわねえ。まぐわつて、できた赤ん坊こそが
赤白一渟の本尊なり、てのがお題目なんだからよ。そちらの生臭坊
主より、よほど筋が通つてらあ。てめえも、説教を聞いてただろう
が、こり」

「邪教は邪教だ！ きりしたんにも劣る外道……」

「うるせえなあ

少々勢いをつけた切つ先で、清月は庄屋の顔を右横にないだ。

庄屋の口の左端が、耳の下まで一直線に裂け、歯列がのぞけた。

「あああああ

悲鳴がもう声にもならない。庄屋の腰の辺りがぐつしょりと濡れ
そぼち、さらに脱糞の臭いが漂い始める。

「第一、坊さんのせがれはもうお役御免よ。村の女に手エだそうに
も、せがれがたなきや悪さもできめえが」

からからと、血塗れた刀をひっさげたまま清月は邪氣なく笑った。
「もつとも、勃つたところで、やつぱり手はださねえだらうがな。
明妃はこの世でただ一人の結縁と成す、だとよ。女房もいねえ俺に
や、わからねえがな」

庄屋はもうその声を聞いていない。白目を向き、口から血と涎を
ないませに噴きこぼして失神していた。

「けつ」

つまらなそうに吐き捨て、懐の手拭いで刀身をぬぐう。人脂に墨
りきつた刀は、なまくらよりも役立ちそうも無かつた。

「十人斬つて、このざまか。……一本……いや、三本は要るな。役
人から獲りながら、代えていくしか……」

「清月さん、いなさるか」

彼を呼ぶ声と共に、数人の足音が、屋敷の中に踏み込んでくる。

「清さん、……庄屋さんも殺しただか」

来たのは、村の若い衆が五人だつた。どうに旅立つたはずの彼ら
を見て、清月は面食らつ。

「こんな爺い、殺すまでもねえ。……なんで、お前達、まだ村にい
やがるんだ」

「おらたちも、役人と戦うだよ」

「馬鹿かおめえら。やつとうに触つたこともねえくせに」

「代官所の捕手相手に、一人でかみつこうつてあんた様の方が馬鹿
だよ」

笑つて、その内の一人が言い返す。やくざ達の屍を見、庄屋の有
り様をみていながら、残りの者たちも怯えてはいない。それなりに
胆の座つた男たちであるようだ。

「つるせえな、斬るぞこら。邪魔だ邪魔だ、とつとと兄者たちを追
え。まだ間に合つ」

ぶんぶんと、棒切れで犬を追い払うように刀を振り回し、そのま

ま清月は屋敷を出、村の入り口に向かった。その後を、それこそ懷いた犬のように、若者達がついていく。

「おらの嬢は、代官所の役人に、貢がれただよ。首くくって、死んだ」

「おらのいいなづけだつたおさとも」

「上人さまには悪いが、おらたちは、地獄に落ちてもええ。ええんですよ」

「庄屋さんの悪行に田口つぶつてた役人に、一泡吹かせてやりてえんですよ」

「ああ、うるせえうるせえ。好きにしゃがれ、どうでてめえの命だ」

「險悪な顔つきの清月とは反対に、若者たちの顔が明るく晴れる。竹を切つてきますだ」

「おらたちは、役人の動きを見て来ます」

生き生きと、死に向かう彼らを、苦い顔つきで清月は眺めていた。喧嘩は好きだが、戦は嫌だ。自分が自分で無くなつて、大きな流れに飲み込まれる。

「関が原じやねえんだ」

武士は己ひとり。無辜の農民をひとごとく流れに巻き込んで、それでいいものか

「なにがいいのですか」

さらに一刻前、古寺のなかでそう麗月とやりあつたばかりだ。

「無闇に死ぬ事はならぬと御坊の教え、やはりお前にはわからぬか」

「うるせえ。子供と年寄りつれてちや、いかにいますぐ発つたところで、必ず追いつかれる。俺が勝手に居残るんだ、いいも悪いも、言われたかねえ」

「逃げきれなければ、その時のことだ。無事に落ち延びる事ができれば、無益な殺生をせずに済む。役人といえども、同じ人間だ。争いたくはない」

急な旅立ちにわき返る村の騒ぎを聞きながら、将月も険しい表情

で弟を見つめる。

「それでも、共に来てはくれぬのか、清月……」

「聞けねえよ、兄者。それだけは」

兄は、憧れの全てだった。度量も剣の腕前も、兄には及ばない。なにより、家名をすべてまで、妾腹の、しかも双子の自分たちを守つてくれた兄。

畜生腹を口実に、弱小武家の母の実家を潰すことが決まった時、そして、自分たちも亡き者にすると決まった時に、将月は命を下した藩主を、斬った。人間として尊敬できるところは向一つ無い男だったが、それでも将月は苦しんだだろう。

実の父親を殺したのだから。

放浪のなかで、かの老僧と会わねば、追手をまたとも割腹していたに違いないのだ。

老僧は、双子にとつても、父であり、祖父のようなものだった。立川流という名の禍々しさからはかけ離れて、僧の説く教えは明快で、濁つたところが何一つない。だからこそ、この何も無い貧しい村で、彼らは歓待された。

やせた土地に、蕎麦や稗をほそぼそとつくりながらも、終の住処を見つけたと安んじていたものを

「なにもして無い者が、なんで追われなきやならねえ。俺は逃げるなんざまつぱらだね」

「ことを荒立てても、村の者が迷惑するだけだ。だからこそ、私たちが彼らを守らざしてどうする

「代官所の木つ端役人如き、俺一人で片づけてやるわ。やつしたら、のんびり荷造りに帰つてくればいい」

「一人でかなう訳ないでしょ、この馬鹿!」

「お前の憎まれ口も、聞かなくてすむは清々だぜ、つひ」

「そういうて、清月は立ち上がる。

「御坊には、よろしく言つとこてくれ。どうせ、顔をみせたらり説教垂れるに決まつてるからな。……あとは頼んだぜ、兄者、つひ」

「清月、どうしても残るか……」

「どうしてもだ。それにもう一つ、俺はどうしても庄屋に挨拶しておかなきやあ、気が済まねえんだよ」

畠になつて、役人が来る事を知らせた庄屋。村一つあずかる身でありながら、金と女を鼻薬に、おどがめもないそうだ。

したり顔で、村人たちを罵つた顔を思い浮かべると、清月のはらわたは煮えくりかえる。

「ああ、それから、こいつを借りてくれ」

そういうて、清月が懐から取り出したのは、黒い独鉢杵だ。

黒曜石の刃を、銀の金で接いである。独鉢としては異常な造りだ。

「お前、それは……」

「兄者の刀のかけらぐらこ、縁起かつぎで持つていつてもいいだらう?」

「兄上、私からもお願ひします」

珍しく、うららが清月の肩を持つ。清月が、明らかに老僧のものから盗んだと知つてゐるはずなのに。

「じゃあな」

わざとつつけんじんご、今生の別れを告げる。

兄は、何も言わなかつた。うららも、又。

だが無言のうちに、清月を案じる気配がひしひしと伝わる。それを踏みにじつて、背を向けたのだ。

村人に声をかけ、その足で、庄屋の屋敷を守つていたやくせとやり合つた。

「もつ、あとには引けない。否、引かぬ。

(極楽なんざ、俺には氣ぶつせいだ)

砥石のかけらで、血墨りを削り落とすようにして、刀を研ぎ上げながら、清月はそう思う。

無銘の刀だが、今日初めて人を斬った感触では、業物かもしれない。素人の無茶な研ぎ方で、今は見る影も無いが。

兄は、名刀をおしげも無く寄進し、仏具の材として潰したが、清月は刀を手放せなかつた。逆に、兄の刀が造り変えられていくのが口惜しかつた。鍛冶の男に頼んで、鋼のかけらを取りおいてもらい、山で拾つた黒曜石を刃にすえて、独鉛を作らせた。刃の分まで、鋼は無かつたからだ。

(荒々しき形よ……)

僧は、清月の苛立ちや迷いを、そこから感じていたようだつた。刀を捨てられぬ己、百姓に馴染めぬ己。兄を慕いながら、兄の諭す通りに生きられぬ己の。清月から献じられた独鉛は深く僧侶の懷にしまわれたが、勤行に使われる事はなかつた。

その独鉛が、今は清月本人の懷にある。

(俺に出来ることといつたら、人斬りしかねえやな)

あぐらをかいた清月のそばでは、一人の若者が竹の先に油を塗り、火で炙る作業に余念が無い。こうすることで、斜めにそいだ竹の切つ先は固く強くなる。たまに、もう一人が道の脇から現れて、その竹を数本抱えては、また藪の中に消えていく。

偵察に行つた二人が、何やら細工をしているようだ。

(まあ、好きにするがいいや)

宵闇の迫るなかで、竹を焼く炎だけが明るい。

道の彼方に人影を見とがめて、清月は立ち上がつた。なにかを叫びながら来るそれは、偵察にいついていた百姓の一人だつた。

「清さん、来た。来たよ」

息を切らしながら、ようよう、それを告げる。

「代官まで直々のお出ましだよ、結構な数だ」

「よし。じゃあ、おめえらは逃げな。斬り合い、殺し合いは侍の仕事だ。百姓は、お呼びじやねえよ」

「まだ、そんなこといつてらあ」

意外にも、おおらかな笑い声が、若者たちから上がった。

「罷をつくるのは、百姓のほうが上手いですよ」

「罷だ?」

「忘れちまつたんですかい? 先に行つたよし松は、猪罷の手練じやあねえですか」

「あ……おめえら、それで……」

「もし、村の衆が戻つてこられるなら、村はそのまま残してえです「人死には、村の外にしましょ」や、清さん」

「お、おづ」

立場が逆転してい。自分一人で、と気張つていたが、覚悟は百姓たちの方がよほど出来て。すでに走り出した彼らに肩を並べながら、

「ちえ、いいとこなしだな、俺ア」

「清さんは、お侍だから。ほんとは、清さんには、将月様たちと一緒に、逃げてほしかつたですよ」

「何?」

「これは、おらたち百姓の戦だ。おらたちに生きる力を授けてくださいました上人様や、娘つ子達を取り返してきてくれた清さんたちを巻き込んじゃあ、罰があたります」

「昼に庄屋の話を聞いた時から、おらたち、お上に逆らひつ覚悟ができてたですよ」

「また、笑い。」

「なのに清さん、一人で庄屋をとつちめちまつて」

「つるせえな」

こんなにも、人間は死を前に明るく笑えるものか。陰りの無い笑いだ。

「この若者たちを死なせたくない」と、清月は心から思つ。

「無駄に死ぬな。いけねえとおもつたら、さつさと逃げちまえ。戦は、百姓の仕事じゃねえ。百姓は畠と子供に生えてりやいいんだよ、まったくこの馬鹿どもがよ」

「口の悪いのは、死んでもなおうねえな、清さんは」「つむせえな」

道の脇から、よし松が手を振つて、合図していた。清月達も、同じ道端の藪の中に身を潜める。

「道の真ん中に、穴を掘つてあります」

「急拵えで、あんまり深くはありませんがね、竹をいけておきましたから」

田を凝らすと、確かに指さされた辺りに、柴が散らばり、土が乱れていた。薄闇でも、地面と見分けがつきにくい。

西の空には、わずかに赤みが残つてゐるが、それも間もなく消えるだろつ。

夜が来る。

「いい塩梅だぜ」

舌なめずりをして、清月は刀の柄を握りしめた。

「猪はよくても人間はでかいんだ、馬鹿野郎……測つとけ」
ひゅう、ひゅう、と鳴る自分の息がうるさい。

「まったく……」、三人しかひつかからないじゃねえか、よし公…

…

捕り方は、減つたようにはまるで見えなかつた。清月のまわりを取り囲む十人ほどを残し、代官と捕手たちは、何事も無かつたかのように、村へと行進していく。もはや、留めようはなかつた。

松明に輝く槍の切つ先が、あやかしの田のように、清月を睨む。

刀で斬りあう愚を、彼らは犯さなかつた。

「二十……は、やつたと、思つたんだがな……」

刀を支えに、ようやく清月は立つていて。せめて最期の一足搔きでもしたいのだが、右手だけで構えるには、鋼の棒はもう重過ぎた。かといって左手を腹から離せば、臓物が傷からあふれだす。

「構ええつ

この隊の頭らしい役人が叫ぶ。

すうつと、あやかしが十の目を閉じた。

「ちえつ……兄者たちに、あの世で会わす顔がねえ、な……」

若者たちはどうしただろう。つまく、逃げ延びていればいいが。

「突けえつ！」

槍が、一斉に繰り出された。

振動と鈍い音が体の中から響いたが、痛みはもう感じない。自分の腹や胸に、けら首の根元まで埋まつた穂先が、何かの冗談のようだ。

懐から、ちん、と澄んだ音をたてて、独鉢が落ちた。

「兄者……すまねえ……」

独鉢を追う視線の先、すぐ足元に見知った顔が転がつていた。百姓相手には刀を使つたのだろう。胴体は見当たらない。

見当たらない。

もう、視界が暗くて、何も見えなくなつていく。

夜がきたのだ。

「……無駄死にすんなつて、いつたろ……」

ねじるようすに槍が引き抜かれる。

清月は、砂を詰めた袋のように地面に崩れ落ちた。

夜はくる。

侍の屍の上にも、百姓の屍の上にも。

その匂いに気付いたときにはもう、麗月はそれを浴びていてた。

「兄上、油です！ 離れて……！」

言い終わらぬ内に、松明が投げつけられた。

一気に闇が晴れた。

人の形に芯をみせて、赤々と炎が燃え上がる。

「麗月ッ！」

「あ、に、え、……」

己に火が燃え移るのも構わず、将月は兄を案じて身を離そうとする妹を、抱き留めた。

「酷いと思う心も無いのか、おぬしらは……」

食いしばった歯の根から、絞り出すように将月はつめいた。

捕手の半数以上が、憑き物が落ちたかのように、動きを止めていた。

切り合い、殺し合いは、すでに村境で見聞きした。しかし、相手が狂信の徒であるとはいえ、女が焼け焦げていく様は、さすがに吐き気を催させる。

この在では、まだ打ち首も火炙りも行われておらぬ。役人たちといえど、そうそう死罪にはでくわさない。

それに、罠を仕掛け、不意打ちをかけてきた侍には随分と同僚が殺されはしたが、この男女の邪教徒は、決して彼らを殺そうとはしていなかつたのだ。

男の持つ異形の剣に刃はなく、なおかつ足払いや、小手のみを男は狙つていた。

女にしても、目ざましい俊敏さで捕り方の一人から刀を奪いはしたが、彼女もまた、峰うちに専念していたのである。

「邪教の徒は、人に非ず。獸が道理を説くとは笑止！」

言い切つたのは、良く肥えた代官本人であった。

「そのけだもの風情が、ひどがましいことを申すな。ぬしらのせいで、村の者が死ぬぞ？ わしとて、村の娘たちは惜しいわい、もつたいない事をしてくれたの」

「女銜と通じておつたは、代官、うぬ本人であつたか……」

夜風が、消えかけていた麗月の炎を将月の衣服に移し、再び光が煌々と闇を照らした。

「我等は、人心を乱す行いのひとつだにしてはおらぬ。欲に目が眩

み、詮議もあるそかに無辜の村人を狩りたてて、うぬのほづが鬼畜であるうづがッ！」

否、炎ではなく、男の気迫が闇を退ける。

俱利伽藍の剣を携え、迦楼羅炎をまとうその姿を、彼らは知っていた。

「不動明王……」

誰からとも無く、亥きは広がる。

亥きは、やや波のように名号を唱える声に変わつていった。

「何をしておる貴様ら、外道に手をあわせてなんとするかッ！」

焼けただれた麗月には、まだ息があつた。ふらりと将月の腕を離れる。

何か言おうとして、将月は言葉を呑んだ。ただれたその顔が、笑つたように見えたからだ。

「な、何……？」

焼け焦げた女が、代官に向かつて、歩いてくる。

「女好きの、代官殿」

炭色の唇は、はつきりと言葉を紡いだ。

「好きなものと滅ぶは、本望であります……？」

麗月が代官に抱きつぐと、その手が突然としていた捕手の松明を奪うのは、ほとんど同時だつた。

「地獄に、私がお供つかまつります」

「は、はなせ、離せえ！ 何を見ておる、この化け物を引っ剥がせ！ は、早く、」

燃え盛る松明を代官の懷にねじ込み、それを己の体でふさぐよつにして、麗月は代官を抱きしめる。懷紙に燃え移つた炎は、薄衣のように代官を包み込み始めた。

「兄上 誓いを破るうららを、お許しくださいまし

誰も何もすることが出来ぬまま、火達磨の代官を抱え、麗月は濃

闇へ身を踊らせた。

その先には、沢へと落ち込む崖がある。

身じろぎもせず、体も焼かれるにまかせ、将月は凝然と、その闇を見つめていたが

「麗月、清月　お前たちばかり、無間にやるわけにもいくま」
将月は、捕手達に向き直った。

誰も何も言わぬ。

代官の耳障りな悲鳴が止むと、しんと、静寂のみがあつた。

「二度の罪は、皆、我に帰せられよ。村の者を惑わし、代官殿弑せし罪、この将月が全て引き受ける。」一同、異存は有るまいか
捕手全員が、刀を収めた。村人を追わぬと、その誓いでもあつた。

「では、御免」

言つなり、将月は剣の切つ先を己の胸に押し込んだ。
なまくらのはずの刃が、ためらいのないすさまじい脅力で、背に
まで突き抜ける。

即死であった。

「しょうにんさま、星がふつてくれる」

恐怖で縛られていた村人たちの耳に、無邪氣な子供の声が響いた。

「星……？」

ちらちらと、冷たく、はらりと頬をかすめておかるもの。急いしらえのがんどうの灯りの中に、白く、白く。

「お空に星がのうなつて、ほら、降つてくるよ」

晴れ渡つていた夜空は、いつしか重みのある闇にとつて変わっていた。その空から。

「雪じや……」

「もう、降り始めあつた」

一段と、寒さが増したよつて箇には思えた。楽しげに、木々の枝の隙間からこぼれるそれを追うのは、子供たちだけだ。

「将月様たち、どうなつたかの……」

「でも、追手もこないようだよ。うまくまきなさつたんじゃないかなえ」

「迷わず、追いついて来られるといいがの……」

大人たちのひそひそ声などどこ吹く風と、寒さも、恐怖も、子供たちにはまだ遠い。

雪、雪、と笑い声が響く。

ふいに、その子供たちがおし黙つた。何かに、一心に耳を傾けるかのよつて。

そして、か黒い森の彼方を、一斉に見つめた。

「りんの音だ」

「うん」

「りんの音がする

大人たちは顔を見合せた。何の音も、彼らには聞こえない。

「ほら、また」

「うん、おいでおいでって」

一瞬顔を見合せ、きらりかな笑い声をあげて、子供たちは我先に駆けだした。

「あつちだね！」

「うん、あつちだよ！」

「これ、行くな！ この闇、この山で迷うたら、死ぬぞ！」

あわてて捨吉が子供たちを追つた。子供たちは、何かを目指している。何かの声を聞いている。だが、それが何であるかは、捨吉にも、他の者にも、聞こえず、見えない。

「すだまこだまの悪さじや！」

「山の化け物に、おふみたちがたぶらかされたようー。」

おろおろと、大人たちも必死で子供たちを追いかけ始めた。老僧にも、一体何が起こっているかはわからない。ただ、ほんのかすかではあるが、彼もまた、その音を聞いた。

りん。

闇の中を、子供たちは軽やかに木の根を飛び越え、枝をすり抜け、駆けていく。

足をとられ、下枝に顔を打たれながら、そのあとを大人たちがようよう追う。

「おふみイ

「松坊、留吉イ、どこにいくだあ」

りん。

「上人さま、大丈夫だか。おらがおぶつていきますだ、さあ
あ、ああ、大丈夫。大丈夫だ、お前も、子供たちを追いなさい」

気づかつ若者の申し出を断り、妙に軽く感じる杖で、彼も必死で足を早める。僧には、ききなれた音であった。勤行のたびに、その手に振つていたものの音だつた。

もはや捨吉も、山での指図どころではない。なのに、誰一人、崖や沢に落ちる事も無く、夜の山を走つてゐるのだった。そんな体力も注意力も、誰にも有るはずが無い。床についていた年寄りも混じつてゐるのだ。なのに、無尽蔵の活力が、彼らを満たしていた。彼ら自身も、それに気付かない内に。

無駄死にすんなよ。

ぎょっとして、老僧は足を止めた。

まるで、誰かが自分を支えていたかのような近さで、声が聞こえたのだ。

錯覚

だが、ちん、と澄んだ音を、僧は己の胸にはつきりと聞いた。懐を探つた震える掌は、黒い独鉢を掴んでいた。

「ま、まさか、」

子供たちが、ようやく足を止めていた。何かを拾い上げ、輪になつてそれを囲みながら、きょろきょろと辺りを見回している。

「あれえ、れいげつさま、いなくなつちやつたよ」

「りんはあるのに」

「お母、お父、れいげつさま、どこにいきなさつただ?」

やつと追いついた大人たちに、子供達は不思議そうに尋ねる。もとより、親たちは答えられはしない。

「そんな、まさか

「いくらなんでも、おらたちに追いついて来れる訳がねえ……」

子供たちは、思案顔の大人たちを放つて、大好きな老人の回りに集つ。

「じょうにんさま、はい

「しょうにんさまのりんでしおつ?」

金銅の五鈷鉈。紛れもなく。

「う、嘘だ、いつのまに……」

呆然と、捨吉が来し方を振り返った。

「どうしただ、捨」

「お、尾根を、越しとる……」「はもう、国境の峰ン中だ……」

「はあ、いつのまに」

「夢中で、子供ら、追つていたからのう」

「灯が、ふいに彼らを照らした。

捕手? あるいは鬼火か。

「坊様? そこにおいでなのは、何時ぞやお会いした坊様ではないですか?」

「おお、そなた、木地師の」

一見して百姓でないとわかるみなりの男が、松明をかざして、こちらへやつて来るところだった。皮の上着に裁つ着け袴、大鉈を腰にぶら下げている。

「上人様、こんな山のなかに、知り合いがいなさるかね」

おそるおそる、赤子を抱いた女が、老僧に耳打ちする。

「案ずるでない。お前たちの村にたどり着く以前に、世話になつた方なのだよ」

「とんでもねえ、世話んなつたは、儂らのほうで。漆を探り損なつて沢に落ちてた儂を、将月様たちが助けてくださつたんじやないですか?」

そういうつて、木地師はさつきの子供たちのよつて、辺りを見回した。

「その将月様、どこにいきなさつたかね?」

「はあ、将月様だ? 何をいいなさるね、おまえさん」

「将月様が訪ねて来て、儂に教えてくださつたんだよ。おまえさんがたが、難儀してるとね。ついそこまで、先を歩いておられたのが、ふいとお姿が消えてしまつて、」

いいも果てず、ざくりと音がして、かれらの足元に三鉾剣が突き立つた。ひやつ、と叫んで、木地師が腰を抜かす。

虚空から降つてきたとしか思えなかつた。降りこぼれる、雪と共に。

「将月……麗月……清月よ……」

涸れることのない泉のように、老人の双眸は涙をこぼす。こんこんと、こんこんと。

「戻つてきたのか……よつ、戻つてきたの……」

「上人様？」

「上人様、どうなされた？」

剣にすがるように、老僧はうずくまる。その懷に、独鉢と、鈴を抱え。

「もはや離れまい。末永く、共に行こうぞ……」

それがいつの時代かは知らぬ。だが、伊豆より北の山中に、漂泊の民でもなしに、幕府の支配を受け付けぬ奇妙な集落があつたらし。上人と呼ばれた遊行者のもたらした真密（真言宗）を信仰した彼らには、さらに奇妙な伝承があつた。

鬼が、彼らを守護していたというのだ。

曰く、上人が法具を供養し、ひとたび口訣を唱えれば、忽ち鬼の如き護法がたちあらわれ、危難より村人を救つた、と。だが上人が入定した時、その鬼たちが上人の体をいざこかへ運び去り、以来、法具も消えてしまった、と。

その村も、今は無い。

村の裔も土地から離れ、真偽は、そうしてより大きな歴史の流れにのなかに消える。

上人の名前も、村の名前も、とうに失われた。

ただ、護法の宿る法具は、剣、鈴、独鉢であつたと、風土史には記されてくる。

追記

「それで？」
けだるく、男の吸うたばこの煙が部屋を漂っている。場末のホテルは防音設備もろくに無く、横須賀港の汽笛が耳につるさい。
「その鬼の一人が、俺様つてわけだ」
「ふうん」
「信じてないだろ、おめえ」
「信じるわよオ。ほんと、鬼みたいに絶倫だもん、清ちゃんは」
女の手が、シーツの下でどこぞかに動く。
「ほりあ、でつかい角」
「どこ握つてんだ、馬鹿！」
「あとはお決まりのじやれあいだ。」
「でもさ、清ちゃんはいつも自分のこと、お坊さんだつて言つぐせに、鬼の生まれ変わりってへンじやない？ お坊さんと鬼つて、仲悪そうよ」
「つむせえな」
煙草を吐き捨て、女にのしかかる一瞬、男の目がサイドテーブル

を見る。

黒い独鉛杆が、そこにあつた。

了

結（後書き）

自サイトに掲載してある、某TRPGで作成したキャラクター背景として書いたたわいのない掌篇です。時代背景、宗教・習俗についての考証はされておりませんので、ツッコミ無用でひとつじで承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0941o/>

護法鬼奇談

2010年10月8日13時40分発行